

学生と教員の見方

【学生の見方&考え方】

(3年 竹本倫直)

今回ゼミの一環で四つの学内研究室をワークスペースにする場合どのような使

い方ができるのか。現状把握、法令上の制限や使用時の課題を整理した上で、単一空間を変化させる際の注意や工夫検討に取り組み

変更部位として、研究室間の壁、廊下の壁、床、天井がある。そのなかで私は天井について調べ、天井高を工夫した提案をした。

4つの学内研究室はすべて隣接しているわけではなく、断面にすると「田」の

単一空間の利活用の一提案

【アピールポイント】
何か明確な目標を立て、熱中することが好きです。今は集合住宅に関する知識の向上に熱中しております。

よつな並びだったので、メゾネット型も考えたが、各階での空間のメリハリをつけるため左右の2戸1化のみに着目した。
天井の高さは変えず、部屋の幅のみが広くなると、元のサイズ感より狭く感じてしまう可能性がある。そ

ここで改善案として、天井高が上がるため、床のレベル効率的に建設される建物、改修によって追加的に天井高が上がるため、床のレベルを上げやすくなる。そこが私にはワークスペースの提案として掘りこたつ式のワークスペースを提案した。

温度管理が困難、建築基準法施行令21条での天井高2・1mを確保しな

いといけない点に注意しつつ床のレベルを上げるとワークスペースの区切りがわかりやすく、床下の収納など利活用も可能と考えた。今後、質を上げるために2戸1化や構成部位の可変性は常に考えるべきと感じた。
【教員の展開】
(前島彩子准教授)
単一空間の繰り返しにより、例えば本学の講義棟は、ゼミ教室を基本として、それらを複数つなげて規模の異なる教室を配置し、中でも、作図や模型製作に広い面積が必要となる製図室は、4室を連結させた横長の特徴的な教室である。また、研究室が入る研究棟は、どのつかというかと、研究室を2室連結させた教室や廊下の突き当たりの3室と廊下を一体化させた2戸1化は、元の均質な連続空間に変化を与える改修になる。利活用にあたり、単に広さが変わるだけでなく、従前欠けていた機能が埋め込まれることへの期待と同時に均質空間にどうなじませていくか、使い方の工夫が鍵になりそうだ。

学内研究室をワークスペースにする場合

「天井」に着目し創意工夫

天井高が上がるため、床のレベル効率的に建設される建物、改修によって追加的に天井高が上がるため、床のレベルを上げやすくなる。そこが私にはワークスペースの提案として掘りこたつ式のワークスペースを提案した。これは、居住者の転居や区分所の権利関係といった複雑さがないため、可変性を存